四季のめぐりを身近に感じる

水引細工のある暮らし

ご祝儀袋に使われる水引。この季節、お正月飾りなどで松竹梅や鶴などの縁起物をかたどった華やかな水引を目にした方もいらっしゃるのではないでしょうか。その原点は飛鳥時代にまで遡ると言われています。日本古来からの贈答のしきたりに欠かせない水引ですが、昨今は色や素材のバリエーションが増え、従来の枠にとどまらず、様々な場面で用いられるようになってきました。水引を使って衣食住を彩る魅力的な作品を作っている田中杏奈さんに、手作りの水引とともに季節を感じながら過ごす、豊かな暮らしについて語っていただきました。

水引細工制作●田中杏奈　Photographs●伊藤美香子

自然から離れた都会での暮らしを彩る季節感

水引との出会いは書店でたまたま手にした一冊の手芸本です。10本ほどの水引の付録があり、そのカラフルな色合いに驚かされました。調べてみると想像以上に多くの色や素材のものがあることが分かり、独学で水引細工を始めました。ちょうどそのころ子どもを授かり、3か月ほど後に生後100日頃に行う〝お食い初め〟の儀式を迎え、縁起の良い細工ものを水引で自作して食卓を飾りました。もともと季節や暦に合わせた行事や地域の祭事が盛んな淡路島の小さな町で生まれ育った私にはそれがとてもしっくりときたのです。また、日本には桃の節句、端午の節句、七夕、七五三など、四季のめぐりに合わせて行う行事がたくさんあり、自然の営みや季節の移ろいを表す二十四節気という暮らしの暦があります。自然に囲まれた田舎で暮らしていると、二十四節気にあるような繊細な自然の移ろいを肌で感じることができたのですが、東京で暮らしているうちにそういうものに触れる機会は少なくなりました。そこを、水引細工で補えたら、都会暮らしをもっと豊かなものにできるのではないか……と思ったのが、衣（アクセサリー）食（テーブルコーディネート）住（インテリア装飾品、置き物など）をテーマに本腰を入れて水引細工に取り組むことになったキッカケです。

90㎝のひもが生み出す宇宙

私にとって水引細工の愉しさは、豊富なカラーや素材の中から自分の好みや作りたいものに合わせて組み合わせを考えていくところにあります。通常は、中国の陰陽節の陽の数字3、5、7本のひもを組み合わせて結ぶのですが、その際どんな色の組み合わせにするのかで、同じ結び方でも仕上がったときの印象は異なるので、色も形も作り手の数だけバリエーションは広がります。直径1㎜×90㎝というシンプルな素材で、結び方の種類も限られているのに、そこから生み出されてくるものは色も形も無限に広がっていく、そこが水引細工の愉しさのひとつだと思います。

田中杏奈　たなか・あんな

水引作家　水引結び教室「晴れ」主宰。兵庫県南あわじ市出身。幼いころから伝統文化や手仕事に興味があり、2017年春に出会った水引の素材の美しさや、結びの奥深さに惹かれ、創作活動をスタート。著書に『衣食住を彩る水引レシピ』（グラフィック社）他2冊。

田中さんの
ホームページはこちら →

赤白に金や緑、黄色など、ハレの日らしいお色で結んだ水引結び。平らな基本の結びから、基本の結びをアレンジした応用的な結びを使い、松竹梅や鶴など、縁起の良いモチーフを結びました。

水引細工はじめの一歩

水引細工に合った水引を選ぼう

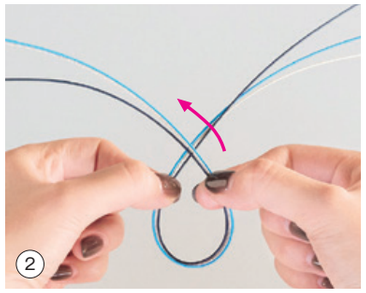
色や素材など、非常に多くの種類が発売されている水引ですが、大きく分けて2タイプに分けられます。ひとつはコヨリに直接色付けをした「色水引」や、金紙銀紙を巻いた「特光水引」と呼ばれるタイプで、一般的なご祝儀袋などに使われています。これはリーズナブルな価格で入手できますが、折れやすくて扱いが難しく、初心者が水引細工で使うにはハードルが高い素材です。もうひとつは、コヨリに糸やフィルムなどを巻き付けた「羽衣水引」、「絹巻水引」、「花水引」、「プラチナ水引」などの種類のもので、こちらは値は張りますが素材に弾力があって折れにくく、丈夫で結びやすい素材です。色数や素材も豊富で、いろいろな表現を愉しむことができます。

美しく結ぶための〝所作〟を身に付けよう

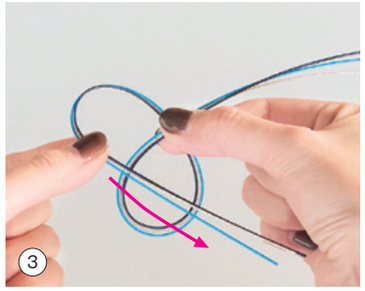
水引は江戸時代には武士の贈答用に使われていました。一度折れると跡が残り元に戻せないため、もし贈答品を誰かが開封して手を加えると分かってしまうのです。できる限り素材に負担をかけず、できる限り触れる回数を少なくし、短時間で結びあげることがポイントです。そのためには素材に合わせた、目的に応じた所作を身に付ける必要があります。たとえば、円弧状にしたければひもをしごき、直線にしたければ触れずにそのままにしておくのですが、いずれも持つ位置や所作が肝心で、それを怠ると結び方は正しくてもキレイな仕上がりにならないのです。私は独学で失敗を繰り返しながら試行錯誤を経て所作を身に付けたのですが、初心者がより早く上達するためには教室に入って教えてもらうのが近道です。

基本のあわび（あわじ）結びの結び方

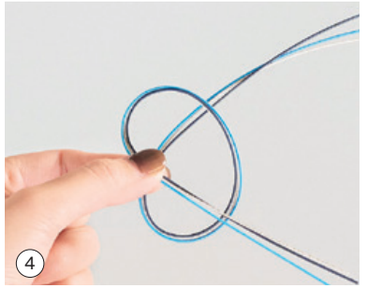
左右の手で写真のように水引を持つ。



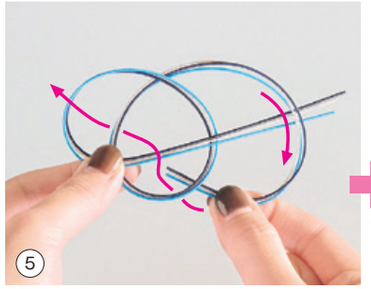
右手で持ったひもを左のひもの上に重ねてしずく型を作る。



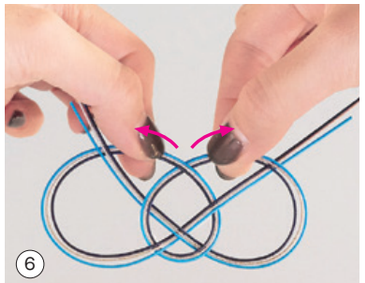
右手でしずくの交差点を持ち、左のひもをしずく型の上に重ねる。



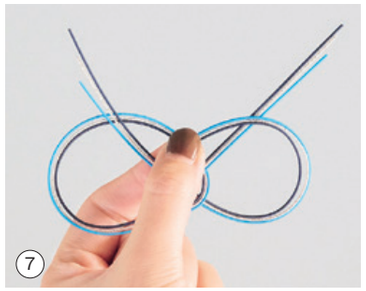
③で重ねたときにできた交差点を左手で持ち、右手を放す。



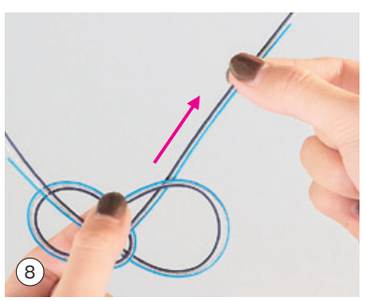
右上に伸びたひもの先端を右手で持ち、右下のひもの上に重ねて曲げながら写真のようにしずく型の3つの穴に下→上→下と交互に通す。



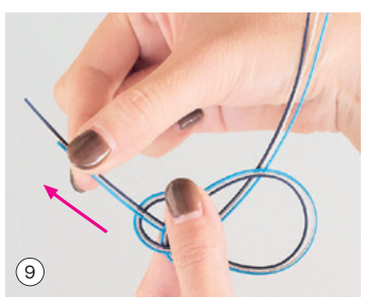
ひもの並びを整えたら、写真の矢印のように引き、しずく型を小さくするように整えていく。



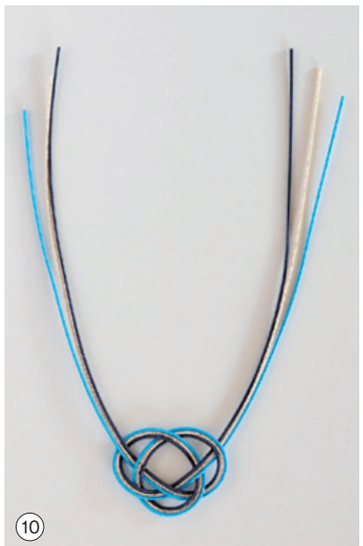
真ん中のしずく型を小さくしたら、しずく型の交差点の頂点を左手で持つ。



その状態で右側に伸びたひもの先端を引いて左側の丸みを小さくするように形を整えていく。



左手はそのまま、左側に伸びたひもも右手で引いて右側の丸みを小さくするように形を整えていく。

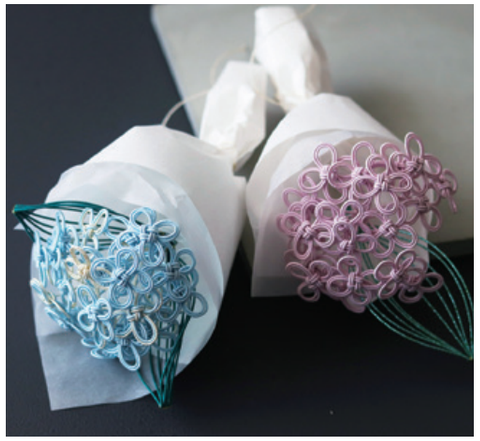


写真のように左右対称の形になったら完成。

田中杏奈さんの 水引細工作品

季節を愉しむ水引小物
テーブルコーディネート、ディスプレイ

テーブルフラワーをテーマにした花の表現。水引素材だからこそ可能な立体感で、一輪挿しからブーケまで多種多様な花を作ることができます。

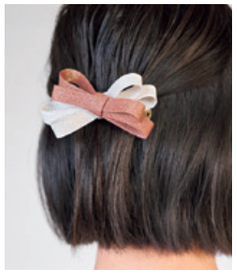


「月白」と「薄桜」という淡く優しい色を用いて、叶結びを主役にデザインした、紫陽花のブーケ。

昨年夏の教室の課題でもあった「鬼灯（ほおずき）」。縦連続あわび結びを用いた、鬼灯らしい立体的でなめらかな曲線が特徴的な作品です。

モミジや松ぼっくりなど、彩り満ちてゆく秋の色彩を、様々な色と結びで表現した秋の森の吹き寄せ。

和のテイストで装う水引アクセサリー



右から、鴇色（ときいろ）三色ビラかんざし、水引バンドの髪飾り、わた雲の髪飾り、四葉のブローチ。菱餅カラーと呼ばれる三色のビラかんざしは、女性らしく上品な鴇色をメインに、青苔・鳥の子色と、風情ある美しい名がついた水引をセレクトしています。どれも、著書『衣食住を彩る水引レシピ』に作り方が掲載されている水引アクセサリーです。

0.5mmに満たない細さの、美しい水引素材を使用した、空気のように軽く繊細な水引結びの耳飾り。年齢問わず、ハレでもケでもいろんな場面でお使いいただける、水引アクセサリーシリーズです。

©石野千尋

タイトルページ（P3）作品
「春永のクロストレック」について

クルマを水引で表現するのにちょうど良さそうなサイズに仕上げるために、モデルとなるクロストレックの写真を探し、左右10㎝ほどにプリントし、それに合わせて水引を5本取にしました。色はSUBARUのコーポレートカラーのブルーに仕上げることが決まっていたので、水引のカラー5色の組み合わせを考え、ボディ部分の結びは〝あわび結び〟から発展した〝松結び〟をアレンジした結び方にして、内側の結びから作りました。

次にカドや屈曲線をアレンジしながら細かいところを足して空間を詰めていきます。土台部分の結びができると水引らしさが出てきます。そこからどこまで細かく細部をアレンジしていくかで、仕上がりの雰囲気が変わります。よりリアルなカタチにしたければ、さらに縁取りを付けて窓もつけられますが、やりすぎると結びの味わいや水引らしさが感じられなくなってしまうので、どこまでデフォルメするかが重要です。

今回は外側の縁取りを作っただけでクロストレックらしいフォルムが出せたので、後は水引の質感や繊細さが分かるようなあしらいを考えました。クルマの前と後ろのライトのモチーフやセンターのバックミラーのあたりに入るアクセントは〝あわび結び〟で表現しています。ホイール内部は、五芒星のようなカタチを入れてみたのですが、藍色にシルバーを載せるとかなり存在感がでてしまうので、極細水引という細い種類のものを入れてみました。

制作する際に気を遣ったのはクロストレックの独特なアウトラインのフォルムを再現することです。水引はしごいてカーブさせるのですが、その際力を入れすぎると曲線が深くなってしまうため、今回のように微妙な曲線を思った通りのカタチに滑らかに仕上げるためにはとても繊細な力加減が必要なのです。クロストレックらしい曲線をキレイに出すところが最も苦労したところです。